

エルサルバドル系女性の米国への移動の 歴史社会的要因：男女間の相違点に注目して

中川正紀

歴史的に見て、貧困層および労働者階層のエルサルバドルの女性は、通例家庭外に仕事を持ち、雇用の機会を求めて都市部に移住し、生存や社会正義のために組織として団結することに関わってきた。実際、エルサルバドルには、女性たちが政治運動を指揮し、社会変革を求めて集団行動に参加してきたという伝統がある。こうした過程で、〈母親らしさ〉と〈女性らしさ〉が調整され、さらに再調整されて、2つの〈らしさ〉には、育児の経験だけではなく「国家による抑圧に対しても子どもたちと自らを防御し」、最も困難な経済的状況の際に自活して子供を養うために公私の境界線をあいまいにすることも含まれるようになっていく。〈母親らしさ〉をこのように多面的に定義づけることによって、貧困層・労働者階層の女性たちは、家族を養うための選択肢のひとつとして自ら国境を越えて移動することを検討することが可能となったのである⁽¹⁾。

エルサルバドル系社会学者のレイシー・J・アブレゴ (Leisy J. Abrego) は、以上のように、本国エルサルバドル社会において伝統的・慣習的に定着してきた〈母親らしさ〉と〈女性らしさ〉という社会的期待をうまく調整させることによって、移民女性たちは自らを取り巻く苦境から生じる喫緊の必要性から移民行動を決意し実行に移すことができた、と述べる。

拙稿「米国ロサンゼルス在住のエルサルバドル系女性による移民の歴史と現在：1970年代までの移民行動から見えてくる実像」⁽²⁾ですで見たとおり、エルサルバドルから米国へのヒトの移動の歴史は20世紀初頭から見られ、しかも、1970年代までの対米移民には、女性もかなりの割合を占めていて、ときにはあとからやって来る移民たちに対して女性移民たちは「先駆的な」存在として重要な役割を果たすこともあった。それでは、いったいなぜエルサルバドルからの移民に女性がそれほどまで目立った存在となったのか。また男性ではなく女

性が移民することに本国社会からの風当たりはそもそもなかったのであろうか。そして、もしあったとすれば、女性移民たちはそれをどのようにして乗り越え、はるばる中米地域から少なくとも3つの国境線を越えて米国までやってくることができたのであろうか。本稿では、こうした問題を男性移民の場合と比較することによって、女性ならではの移民の特徴について考察する。

1. 移住に伴う家族離散の歴史

前述の拙稿では、フェミニズム研究・社会学者、クリスティーン・M・ゼントグラフ (Kristine M. Zentgraf) が1970年代から80年代に渡米したエルサルバドル系女性およびグアテマラ系女性30人を対象に、主に移民動機についてインタビュー調査した結果も紹介されている。筆者は、ゼントグラフが挙げた諸事例を主に次の3つに分類した。①政治的動機による事例 (30人中、10人が該当)、②経済的動機、および／あるいは家族関連の動機 (③の場合を除く) による事例 (30人中、16人が該当)、そして、③夫や恋人への不信感が動機となった事例 (30人中、約半数が該当)、の3分類である。ただし、人によっては、動機が複数にわたることもあった⁽³⁾。

このなかで、特に③の事例は、夫や恋人が自分に対して非協力的であったり、暴力などによる脅威となる存在であったりする場合を主に指す⁽⁴⁾。無責任で身勝手な相手、暴力的な相手、経済的に頼りにならない相手などの男性像がここでは見え隠れするが、それでは、そうした男性の特徴はエルサルバドルを含む中米諸国において、はたして偶発的なものなのか、それとも何らかの形で歴史的・社会的に創出されたものであったのか、を以下で考えてみたい。

エルサルバドルからの女性の移動が歴史的にも顕著であった要因は様々考えられるが、まずは19世紀にまでさかのぼってエルサルバドル人の移住の歴史の始まりとそれがかれらの家族の特徴に与えた重大な影響について見てみよう。

当時盛んになっていたコーヒー豆生産関係の仕事を求めて農村部のエルサルバドル人が国内での季節的な移動を開始したのは、19世紀の半ばから後半にかけてのことであった。しかし、1920年代の半ばには、地位を悪用した政治指導者のおかげで土地を失った者たちが越境して隣国のホンデュラスのパナナ産業

で働くようになっていた。⁽⁵⁾そして、こうした移民パターンが永続化することで、エルサルバドルの農村部の人間関係に多大な変化が生じるようになった。

社会学者のセシリア・メンヒバル（Cecilia Menjivar）によれば、こうした出稼ぎ生活者は社会の主流から隔絶された存在で、しかも繰り返される性格のものであったため、出稼ぎ男性と出稼ぎ先の女性による同棲形態の割合が高まり、それに伴い非嫡出子の増加が見られるようになった。男性は新しいパートナーのために元の家族を捨てて移住し、さらにそうした移住は一時的なものではなくなってしまうことが多かった。またそこまでいなくても、家計が逼迫しているがゆえに男性は職を求めて移動生活を繰り返さなければならず、そのうえ賃金労働者であるがゆえに収入は極端に少ないため、残された女性は家事を担いながらも生存のために自ら労働市場に参入せざるを得なくなった。こうして、男性が働きに出たまま帰らなくなり女性が一家でたった一人の働き手となることは珍しくなくなったのである⁽⁶⁾。

これは、ラテンアメリカ諸国に古くから見られ、今ではフェミニズムの攻撃的ともなっているマチスモ（machismo）の考え方に通じるものと考えられるが、こうした男性の身勝手な行いがさらに女性世帯主が多く発生する傾向を助長してきたといえよう。このようにして出現した一部のエルサルバドル人家庭の離散化傾向にさらに追い打ちをかけたのが、1979年からの中米紛争による国土の荒廃であり、これによって労働者階層の女性たちが生存のために労働市場に参入する可能性がさらに高まることとなった。⁽⁷⁾以上の経緯から、エルサルバドルは女性世帯主世帯の占有率が1990年代半ばにおいて全世帯の31%となり、中米諸国のなかで最大となっていたのである⁽⁸⁾。

以上のように、100年以上も前の慣習の名残りがいまだにエルサルバドルの家族形態の特徴を支配していることこそ驚異といえるが、夫婦間における男性の側の身勝手さを半ば認めるという風潮が、先の拙稿で扱った中米からの女性の個人的な移民理由の諸事例をある程度説明してくれるように思われる。

2. 女性移民と男性移民に対する本国人の見方の違いの原因

男性に比べ、女性には他国への移民を決意するのに超えるべき様々なハード

ルがより多く存在するようである。アブレゴは、エルサルバドル本国における親子関係の在り方および親子関係に関する慣行が、男と女、すなわち父と母に対して異なる規定がなされていることが、特に潜在的な女性移民が移民行動を決意するのに厳しい試練を受けることにつながるという⁽⁹⁾。

家族関係に関する慣行は常に変化しつつあるものの、〈母親らしさ〉と〈父親らしさ〉の定義は著しく対照的に形成されることが多い。エルサルバドルでは、〈母親らしさ〉は〈女性らしさ〉の理想形として尊ばれるが、〈父親らしさ〉は〈男らしさ〉として社会的に容認された男性的特徴の一つに過ぎない。さらに、母親の方が父親よりも道德面で優れていると文化的に特徴づけられるため、家族を代表して母親が自らを犠牲にすべきものと期待される。このような犠牲を求める期待は、特に貧困層・労働者階層の母親に対して強く働くため、子供の扶養のために親は、労働市場への参入、政治活動、移民行動を通じて、家事という私的な分野から公的な分野にも参加していかなくてはならないのである。一方、〈父親であること〉は社会階層の別なく、公的分野への参与を通じて家族の威厳・保護・管理につながる。⁽¹⁰⁾このように、母親である女性が〈母親らしさ〉という理想を実現しなければならないという期待が強いがゆえに、求められる自己犠牲はそれだけ甚大なものとなるといえよう。

自己犠牲的な扶養者であれという期待は、経済的に不安定な貧困層・労働者階層の女性に対しては特に、うわさ話による行動規制や周りからの監視の目によって、さらに強化される。そのため、女性は身を粉にして労働者・抗議者・移民として可能な限りの務めを果たす以外にない。一方、男性は感情の抑制、肉体的力の誇示、あるいは性的能力のちらつかせによって〈男らしさ〉を達成し維持することが比較的容易であるという⁽¹¹⁾。

当然ながら、エルサルバドルにも父親としての義務を果たさないことは犯罪であると規定する法律は存在するが、実際にはそれが厳格に履行されることが少ないため、父親としての責任を果たさない父親が多出する可能性が高まっている。たとえ経済的に子を扶養できなくとも、自活し、平然と振舞い、複数の女性と性的な関係を持つことなどによって、自尊心を確立する道が男性には社会的に認められているのである。一方、移民女性は、本国に子を残して移民することは、母親としての役割の境界を超えることにつながると社会からみなさ

れ、大きなスティグマ（「悪い母親」*mala madre*）や重大な罰に悩まされる。アブレゴによれば、それは中米地域に限らず、世界各地において、移民男性と違い、移民女性は同様の批判を受けているという⁽¹²⁾。

もちろん、移民行動やその後の定住によって、女性および男性にとって適切な行動とは何か、に関して男女のそれぞれの認識が変わっていく可能性はある。移民先・定住先では、移民女性の方が自立度を増し、移民男性がもっと家事を分担するようになるという形もありうるかもしれないが、そうした男女間の折り合いの問題は、男女間で労働市場での機会と経験が異なるため、想像されるよりも厄介なものとなる、とアブレゴは言う。たとえば、中米系女性研究者のヤハイラ・M・パディージャ（Yajaira M. Padilla）が指摘するように、経済が上昇傾向にあるときでさえも、雇用機会では移民男性よりも移民女性の方が恵まれているため、往々にして移民女性の方が稼ぎの多い場合がある。もともと本国では男性が主、女性が従とする関係が成り立っていたとしても、収入状況が男女で逆転する米国社会においては、そうした主従関係が弱まったり消滅したりすることは必ずしもなく、むしろ夫側のプライドを妻側が傷つけまいとするあまり、両者間の従来の主従関係が強化されてしまうという可能性もある、という⁽¹³⁾。

また、アブレゴは、本国での男女間で各々に対する期待の度合いや内容が異なることが、さらに移民の本国への送金行動にまで現れてくる、と指摘する。たとえ、移民女性の方が移民男性よりも賃金が低くとも、それに応じて送金額は少なくなるとはいえ、男性よりも送金が滞りなくなされる傾向が強く、それだけ女性による送金の方が信頼に足るものとみなされる。送金は単なる経済的行動という以上に、家族どうしの責任感を反映したものとアブレゴは見る。夫妻ともども、あるいは夫妻のどちらか一方が他国へ出稼ぎに出ている場合、こうした国境を越えて多面的・多層的に結びつきを保っている家族を「トランスナショナル家族」（*transnational family*）と呼ぶが、このような家族においては、女性の送金の方が一貫し、しかも金額が多い場合もあるという。それはどのようなとらえればいいのか。そこには、母、祖母、女兒弟その他の女性親族として、育児の仕事の大半を女性が担うべきとする考え方がエルサルバドルではいまだに強く、このような女性特有の性格を持った送金行動には、女性に対するそのよう

な期待の結果ゆえに、残してきた家族に対する愛情の強さが反映されると捉えられる、とアブレゴは述べる。そうした意味で、父母のうち特に母親が移民して本国に子が残っている家庭の方が、それ以外の家庭と比べ、残された者たちへの感情的な損失が異常なほどにまで大きいということになるというのである⁽¹⁴⁾。

3. 現地予備調査のデータからいえること

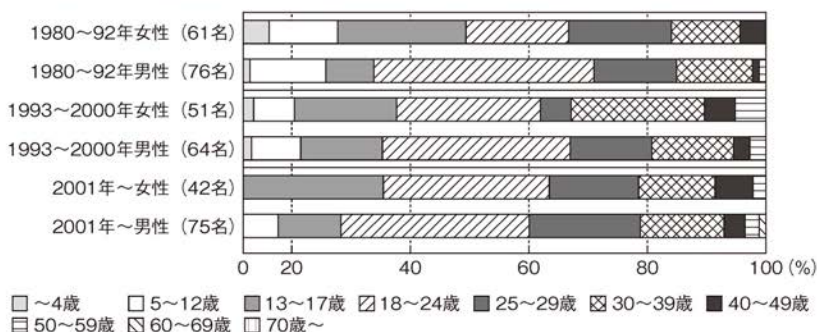
以下では、今見た複数の研究者からの見解に基づく、エルサルバドル社会の歴史的状況に影響された現在の〈母親らしさ〉と〈父親らしさ〉をはじめとする、男女の期待される在り方が、筆者の過去における共同研究調査の結果のなかにどのように反映されていると考えられるか、を見てみよう。

筆者は、2010年8月および2012年2月、8月に、中川智彦氏（現在、愛知県立大学等非常勤講師）とともに、ロサンゼルスでエルサルバドル系住民を対象に、アンケートによる予備調査を行った⁽¹⁵⁾。ここでは、データをできるだけ多く利用するために、2010年調査と2012年調査のデータを合わせて用いることとする。ただし、学歴・取得学位、本国の親族への送金の有無および年間送金額、本国、での選挙における投票の経験、そして本国における運動・活動の経験については、2012年調査結果のデータしかないため、そのデータのみを用いることとする。

また、データは入国時期ごとに男女別で提示するが、1979年以前の入国者のデータは統計的意味があまりないほど極めて少数なため、可能な限り割愛することにした。男女別にデータを見ることで、男性移民と比較して女性移民はどのような特徴を持っていたのか、を考察する。

1980年以降は、以下の基準で区分する。(i)1980～1992年：本国エルサルバドルで中米紛争が起っていた時期、(ii)1993～2000年：本国での中米紛争が和平によって終了した直後の時期、そして、(iii)2001年以降：ほぼ、1,000人余りの規模の死者を出した2001年2月のエルサルバドル大地震の影響の残る時期、となる。

表1. 入国時期ごとの入国時年齢（2010年調査・2012年調査合同）



① 入国時期ごとの入国時年齢（表1）

表1は、3つの時期に米国に入国した人々の入国時の年齢を示したものである。(i)では、男女とも0～12歳までは15%前後を占め、しかも4歳以下では女性の割合が多い。また、13～17歳では、女性の方が男性の3倍近くになっていて、その層の女性移民が多いことがわかる。逆に、男性の方が成人に達してから入国する割合が高いといえる。

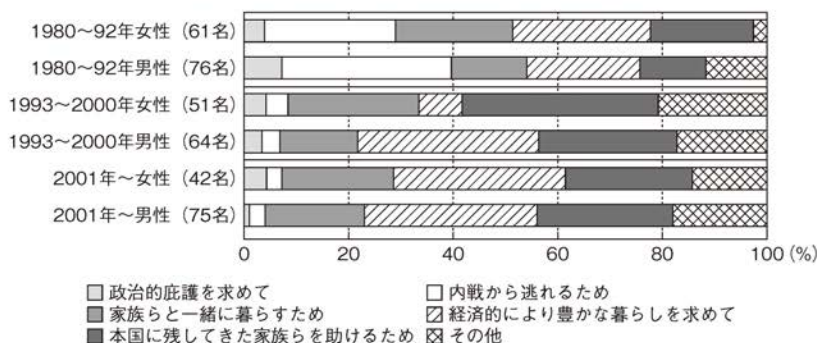
(ii)では、(i)について述べたほどの著しい差はないが、それでも13～17歳の層では女性の割合が多いのに対し、18～24歳では逆に男性の方が多い。さらに、(iii)の時期で見ると、18～24歳の層ではあまり差はないものの、13～17歳の層では女性が2倍ほど多いことがわかる。

3つの時期を通じてみると、13～17歳の層では女性の割合の方が多く、特に(i)と(ii)の時期では、圧倒的である。

② 入国時期ごとの移民動機（表2）

表2は、3つの時期に米国に入国した人々の移民理由を示したものである。内戦が激しかった(i)の時期には、当然「内戦から逃れるため」という理由が多いが、女性では他の理由もかなりの割合で上位を占める。男性移民と比較して、「家族らと一緒に暮らすため」と「本国に残してきた家族らを助けるため」もかなり多くを占めている。前者では、家族の中で夫が先に米国に移民し、妻や子らがあとから移民するというパターンが想像されるが、後者ではむしろ世

表2. 移住動機 (2010年調査・2012年調査)



帯主である妻が率先して、子らを本国に残して米国に働きに行くというパターンが思い浮かぶ。

(ii)の時期にはさらにその傾向が強くみられる。「経済的に豊かな暮らしを求めて」という理由が圧倒的な男性に対して、女性は家族関連の事由が多くを占める。「本国に残してきた家族らを助けるため」も40%近くに達し、世帯主である妻が率先して、子らを本国に残して米国に働きに行くというパターンが多く見られるようになったことが想像できる。

(iii)では、男女とも「家族らと一緒に暮らすため」と「本国に残してきた家族らを助けるため」という理由がかなりの割合でほぼ同率であるが、最も割合が多いのは「経済的に豊かな暮らしを求めて」という理由である。特に、女性も(ii)の時期と比較して、米国への定住を志向する傾向が強まったといえるかもしれない。

③ 入国時期ごとの学歴・取得学位 (表3)

表3は、3つの時期に米国に入国した人々の学歴・取得学位の平均を示したものである。全般的に、女性の方が男性よりも学歴・取得学位の平均が低いことがわかる。年代で見ると、(i)より(ii)の方が男女とも低く、(ii)から(iii)で再び上昇する。さらに、(iii)では、男女の差がかなり狭まっていて、しかも高卒程度に近づいていることがわかる。

表3. 学歴・送金（2012年調査）

	学 歴		本国の親族への送金			
	女性平均	男性平均	送金者の比率		年間送金金額平均	
入国時期	入国時に未成年であった者を除く		女性(%)	男性(%)	女性(\$)	男性(\$)
1980～92年	2.5	1.6	64	70	1,002	1,577
1993年～	2.48	2.6	90	70	1,384	1,881
2001年～	2.7	2.8	88	85	1,919	2,977

学歴・取得学位凡例

1. 基礎教育またはそれ以下（高校での中等教育は受けていない：全く学校に行ったことがない人から9年次まで勉強した人まで）
2. 高校中退（高校での中等教育は受けたが、高校卒業資格は取得していない）
3. 高校卒業またはそれと同等の資格（普通科卒資格・職業技術科卒資格・GEDなど）
4. 準学士あるいは大学・短大中退
5. 4年生大学卒業
6. 大学院進学以上

④ 入国時期ごとの本国にいる親族への送金（表3）

表3はまた、3つの時期に米国に入国した人々の本国の親族への送金の有無および年間送金金額をも示している。送金の有無については、(i)の時期には男性の送金者の割合がやや多かった(64対70)が、(ii)では圧倒的に女性が多く、(iii)でもやや女性が多くなっている。送金額でいうと、時期を経るにしたがい、金額が高まるが、いずれの時期も、アブレゴが指摘したように、女性よりも男性の方が稼ぎが多いせいか、送金額も多くなっている。

⑤ 入国時期ごとの本国での投票経験（表4）

表4は、3つの時期に米国に入国した人々の本国での選挙投票の経験を示したものである。(ii)の時期は両者が逆転するが、(i)と(iii)の時期には、男性の投票頻度は女性を上回っている。しかしながら、女性も男性とほとんど変わらず熱心に投票に出かけていることが数字から読み取れる。これは、冒頭に挙げたアブレゴの文章中の「エルサルバドルには、女性たちが政治運動を指揮し、社会変革を求めて集団行動に参加してきたという伝統がある。」というくだりに合致する現象とも取れる。エルサルバドル女性は、男性とほぼ変わらず、投票行動を頻繁に行ってきたといえよう。

表4. 本国での選挙への参加度（1～5の選択肢番号の平均、入国時未成年だった者を除く）

時期	女性	男性	女性対象人数	男性対象人数
1980～92年	2.2	1.8	23	26
1993年～	1.9	2.0	20	27
2001年～	2.0	1.4	19	33

1. はい、すべての選挙で
2. はい、ほとんどすべての選挙で
3. はい、半々くらいの割合で
4. いいえ、ほとんど
5. いいえ、まったく

表5. 本国での活動・運動への参加（入国時に未成年であった者を除く）
(%)

入国時期	性別 (対象人数)	選挙活動	労働・社会運動	コミュニティ・ ボランティア活動	無し	その他の 活動
1980～92年	女性(44)	6.8	0	6.8	86.4	0
	男性(35)	11.4	2.9	6.7	60	0
1993年～	女性(24)	8.3	4.2	25	58.3	4.2
	男性(41)	12.2	2.4	19.5	65.9	0
2001年～	女性(19)	15.8	5.3	5.3	73.7	0
	男性(38)	10.5	2.6	7.9	76.3	2.6

⑥ 入国時期ごとの本国での様々な活動・運動への参加度（表5）

表5は、3つの時期に米国に入国した人々の本国での活動・運動への参加経験を示したものである。時期を追うごとに、本国での選挙活動、および労働・社会運動への女性の参加度は上昇傾向にあるが、男性はほぼ横ばいとなっている。

4. むすびにかえて

以上見たように、女性移民特有の移民理由の多くは、歴史的・社会的に20世紀初頭の家族内の夫によく見られた職を探す移住生活の結果生じた家族の離散

に端を発したものであるといえ、それによって女性世帯主世帯がエルサルバドルでは特に珍しくないものとして定着してきた。女性世帯主世帯では、家計を支えるために、女性世帯主が家庭内の仕事と家庭外の仕事を負う必要があったが、それでも社会一般には女性が男性と同様に、子らを残して他国に出稼ぎに出かけることは、男女に伝統的に区別して期待されてきた役割の違いによって、かなりの社会的抵抗を受けやすいものであった。潜在的な女性移民は、伝統的な〈母親らしさ〉に移民行動も入るよううまく折り合いをつけて、米国への移動に挑戦していくことになる。もともと、そうした〈母親らしさ〉はあとに残してきた子らへの深い愛情にも反映され、米国から本国への送金行動にはかれらへの母親としての責任を感じさせる持続的で信頼のおけるものにとらえることができる。

筆者の共同調査によるデータ結果からは、時期によって多少の違いはあるものの、女性移民は未成年のうちから米国に渡ることが多いことがわかった。次に、移民動機を見ると、1980年から2000年くらいまでの入国者は本国に残してきた家族のために移民してくる女性の方が男性を上回る割合であったが、2001年以降の入国者ではむしろ男女別の移民理由の特殊性は少なくなっている。

学歴は女性が男性を下回る傾向にあるが、2001年以降はその差も縮まり、また高卒程度に近づきつつあることがわかる。本国の親族への送金者率については、1993年以降の入国者では、女性が男性を上回っているが、送金額についてはどの時期の入国者でも女性の方が男性よりも少ない結果となっている。

さらに、本国での選挙投票行動への参加度では、男女間ではほとんど変わらず、しかもかなりの頻度で参加していたことがわかる。また、本国での活動・行動への参加度では、時期を経るごとに女性の政治運動参加者率、および労働・社会運動への参加者率は上昇している。

以上、本稿では、なぜ女性は移民するのか、という問題について、歴史社会的に考察を加え、関連する調査データから読み取れることを指摘した。

註

- (1) Leisy J. Abrego, *Sacrificing Families: Navigating Laws, Labor, and Love Across Borders*, Palo Alto, CA: Stanford University Press, p. 17。
- (2) 中川正紀「米国ロサンゼルスへのエルサルバドル系女性の移動と定住の歴史：移民パターンから見たエルサルバドル系移民の実像」『フェリス女学院大学文学部紀要』第49号、2014年3月、pp. 17-43。
- (3) Kristine M. Zentgraf, "Why Women Migrate: Salvadoran and Guatemala Women in Los Angeles," in Enrique C. Ochoa and Gilda L. Ochoa (eds.), *Latino Los Angeles: Transformations, Communities, and Activism*, the University of Arizona Press, 2005; 中川、pp. 28-31。
- (4) 中川、pp. 30-31。
- (5) Abrego, p.16；この時期から20世紀半ばにかけて少数のエリート層が米国へと休暇に出かけていたことは、のちの移民の流れに何らかの影響を及ぼしたことは否めない。詳しくは、中川、2014、を参照。
- (6) Cecilia Menjivar, *Fragmented Ties: Salvadoran Immigrant Networks in America*, Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, pp. 41-42; 一家の稼ぎ手として〈男らしさ〉を証明することができない貧困層・労働者階層の男性たちの多くは、配偶者以外の女性との間にも子をもうけることで〈男らしさ〉の証明とする性別の規範に従ってあちらこちらを移動するため、家を留守にし、結局は育児放棄に至る傾向にあった (Abrego, pp. 17-18; Maria Angelica Faune, "New, Wider Households in Women's Hands," *Envio* 169, 1995, Available at www.envio.org.ni/articulo/1881)。
- (7) Abrego, p. 17.
- (8) Faune
- (9) Abrego, p. 10.
- (10) Abrego, p. 10.
- (11) Abrego, p. 10.
- (12) Abrego, pp. 10-11.
- (13) Abrego, p. 11; Yajaira M. Padilla, *Changing Women, Changing Nation: Female Agency, Nationhood, & Identity in Trans-Salvadoran Narratives*, Albany: State University of New York Press, 2012, p. 97
- (14) Abrego, pp. 11-12.
- (15) 具体的な調査結果と分析については、以下の論文を参照。中川正紀・中川智彦「ロサンゼルス地域におけるエルサルバドル系住民の政治意識と政治行動: 2010年9月の現地予備アンケート調査の結果に基づいて」『フェリス女学院大学文学部紀要』第46号、2011年、pp. 183-204；中川、2014年。

謝辞・その他

今回の紀要論文執筆に際して、2010年および2012年のロサンゼルスでの予備アンケート調査の結果を使用した。共同研究者・調査者の中川智彦氏（愛知県立大学等非常勤講師）に御礼申し上げる。

また、「ラテンアメリカにおける国際労働移動の比較研究」研究会（代表者・松久玲子教授、同志社大学人文科学研究第14部門研究代表）と日本ラテンアメリカ学会西日本部会との共同で、2014年12月20日（土）に同志社大学烏丸キャンパスで開催されたラテンアメリカにおける女性移民労働者に関するパネル形式の報告会では、浅倉寛子氏（Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social - Unidad Noreste）、Marta Torres Falcón氏（Universidad Autónoma Metropolitana - Unidad Azcapotzalco）、松久玲子氏（同志社大学）の各御報告、および討論者である北條ゆかり氏（摂南大学）からのコメントから大きな刺激を受け、本稿の執筆にあたり参考にすべきことが多々あった。この場を借りて、感謝いたしたい。

最後に、在ロサンゼルス市のエルサルバドル領事館の関係者の方々、現地NPOのEl Rescateの関係者の方々をはじめとして、2010年および2012年の調査の実現のためにご尽力いただいたの方々、およびアンケートに御協力いただいた現地エルサルバドル系住民の方々に深謝いたしたい。

なお、エルサルバドル女性の活躍についての邦語文献として、ソニア・フィカ、細野昭雄「第24章 活躍する女性たち——どんな困難にも辛抱強く立ち向かう」細野昭雄・田中高編『エルサルバドルを知るための55章』明石書店、2010年、pp.143-147、があげられる。

筆者はロサンゼルス滞在中に本稿の再校を見直しているが、最近中川智彦氏と訪ねた在ロサンゼルス市のエルサルバドル領事館で現在の在LA領事および在サンフランシスコ領事がいずれも女性であることを知った。エルサルバドル人女性の活躍ぶりが役所関係でもますます顕著になっていることがわかり、あらためてかのじよたちの活躍の場の広がりを実感した次第である。